学びや タイムスリップ

㊵ 児童作品と戦争 （昭和時代）

児童作品には、作られた時代の特徴が表れます。1941（昭和16）年12月8日の対英米開戦で日本が本格的な戦時体制に入っていくとき、戦時色が濃いものになっていきます。

写真①は、開戦の日に4年生が書いた作文です。文中に二度登場するお父さんは、すでに戦場へと赴いていた軍医でした。「今頃どうして居られるのだろう」と父の身を案じています。

この児童は、国民学校卒業後に二条高等女学校に入学。父からの手紙は、その入学を祝う44（昭和19）年5月9日付を最後に途絶えます。終戦後、父の帰国を待ちわびる中、47（昭和22）年6月20日付で「昭和十九年十月二十五日　比島（※フィリピン）レイテ島ダガヘイ」（お父さんの入兵）という題は、父の出征が全ての児童に当てはまるわけではないので、児童自身が決めたのだと思われます。父は前年に出征しており、その時のことを思いながら描いたのでしょう。

写真②は、開戦の翌年に1年生が描いた絵です。「オトウサンノニウヘイ」（お父さんの入兵）

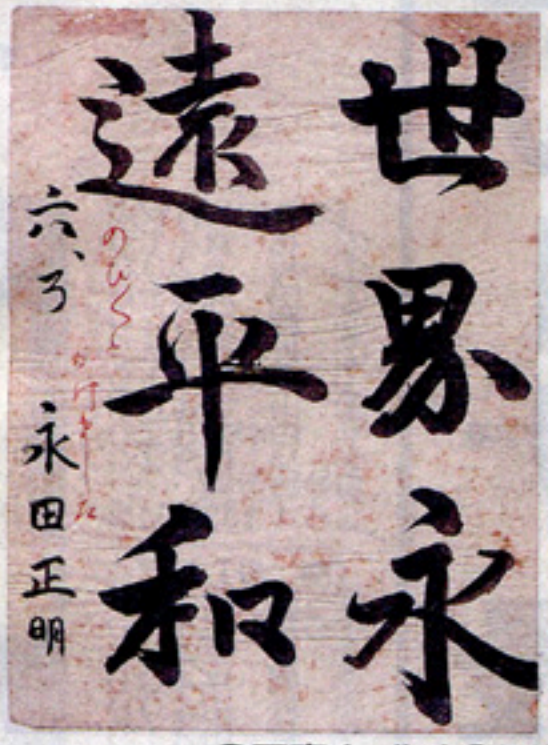
ところで、この児童の作品は、1年生から6年生までの絵、作文、習字などが綴りになってたくさん残されています。戦時下の大変な時期に大切に保管していたのは、母です。では、なぜ母は、わざわざ綴りにして取っておいたのでしょうか。

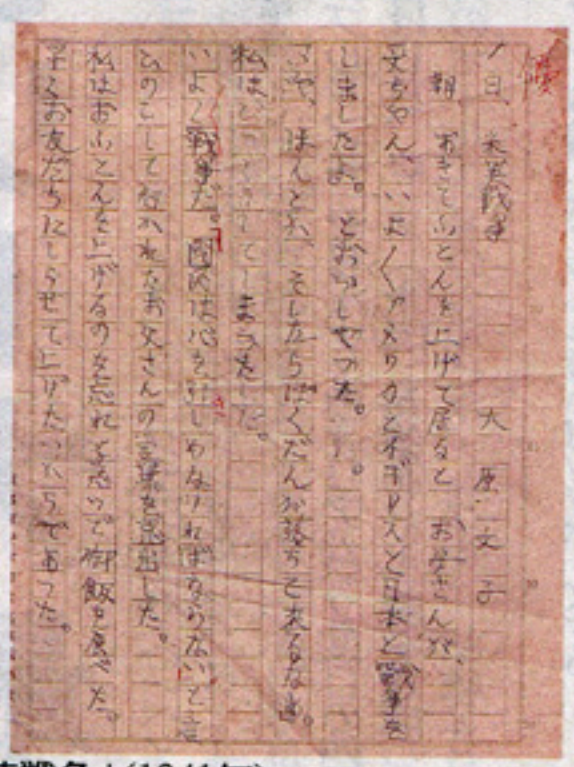
答えは、戦地から父が戻ってきたときに、わが子の成長を見せるためです。しかし、父はこれらを見ぬまま、南方で戦死しました。写真③は、父が戻らぬまま戦後をむかえ、6年生になったこの児童が書いたものです。

（京都市学校歴史博物館　学芸員　和崎光太郎）

◇

今回紹介した資料は学校歴史博物館（下京区）で開催中の企画展「戦争と学校―戦後70年をむかえて」で展示しています（水曜休館）。





㊐写真１、作文「米英戦争」（1941年）
㊧写真３、習字「世界永遠平和」（1946年）

写真２、絵画「オトウサンノニウヘイ」（1942年）